泉大津市文化財調査概要 1

七ノ坪遺跡発掘調査概要

1975. 3

泉大津市教育委員会

蒼　氓　の　跡

私達の住んでいる和泉地方は、古くは河内国の一部でありましたが、奈良時代中頃に独立して、和泉国府が置かれました。その港として栄えたのが小津であり、現在の泉大津の名の起りとされています。津とは港のことであります。本市の南部を流れる大津川の河口付近に位置する高津町は、国府津の名ごりでありましょうか。

このように、和泉地方が早くより開けていたことは、諸先学の明らかとするところでありますが、まだまだ解明されていない部分が多々あります。大地はその部分を深く地中に刻みこんで、静かに現在を見つめています。しかし近年の開発の波は、その記憶を無惨にも葬り去ろうとしています。私達は、その記憶を呼び起し、過去を省み、現在を確かめ、未来への糧としなければなりません。そのような意味で今回の発掘調査が、和泉の歴史を追求する上で、少しでも役立てば幸甚であります。

最後に、調査にあたって御協力を賜わった土地所有者の皆様をはじめ、多数の方々の御援助を深く感謝する次第であります。

泉大津市教育委員会
教育長　土　屋　英　六

例　　言

1.　本報告書は、泉大津市教育委員会が、泉大津市豊中に所在する七ノ坪遺跡内に於いて、宅地造成工事に先立って実施した、発掘調査記録である。

2.　調査は、国庫補助事業、および大阪府補助事業（総額 2,000,000円、国庫補助率50％、府補助率25％）として計画し、実施したものである。

3.　本調査は、泉大津市教育委員会社会教育課坂口昌男を担当者として、昭和49年９月18日に着手し、昭和50年３月31日終了した。この間、長畠信之氏の援助を得た。

4.　本調査にあたり、従前の調査の成果を参照した。既往の調査は、長畠信之、佐藤正則、尾野幸雄、杉本俊彦、西本孝男、森茂の諸氏の援助を得た。

5.　出土品の整理は、長畠信之氏及び大阪文化財センター池上事業所が行ない、遺物写真は同文化財センター写真室によった。

6.　本報告書作成にあたっては、佐藤正則氏の協力によるところ大である。

七ノ坪遺跡発掘調査概要

第１章　調査に至る経過

本遺跡は、大阪府泉大津市豊中に所在する古墳時代以降の遺跡である。昭和32年冬、府立泉大津高等学校北門前の水田に於いて、地下げ工事が行なわれた際、同校地歴部々員によって土師器が採集された①。その後も土木工事等によって土師器、須恵器、瓦器等の破片が多量に出土している。しかし、本格的な調査は行なわれなかった為、その性格は明らかでなかった。昭和43年以来、府立泉大津高等学校内で校舎の増改築工事が行なわれ、府教育委員会の４回にわたる発掘調査②や、同校地歴部による試掘調査③がなされており、昭和48年には、同校周辺に於いても、発掘調査が実施された④。以上の結果、４世紀前半の土坑、４世紀後半の住居址・方形周溝墓、５世紀前半の住居址・木棺直葬墓・墓坑、中世の土坑・溝等が検出され、複合遺跡であることが確認された。しかし遺跡の全体像は明確に把握されずに今日に至っている。

泉大津市に於ける市街化の波は東部の農村地帯へも押し寄せ、本遺跡地内も道路の整備により、宅地化が進むことは明らかである。そのようなおり、遺物の散布状態から見て、遺跡の北端と考えられる場所に於いて、土地所有者の八木宗雄氏より住宅建設の計画がなされ、泉大津市教育委員会に工事の届出が出された。市教委は同氏と協議の結果、工事に先立ち緊急発掘調査を行なうこととなった次第である。

発掘調査は、国庫補助事業（総額 2,000,000円）として、昭和49年９月18日に着手し、同年10月18日に完了した。本調査は泉大津市教育委員会の直営事業として、同委員会社会教育課坂口昌男が実施、担当した。

本調査概要は、以上の調査を中心として記載するが、本遺跡の性格をより明らかにするため、付近の発掘調査の概略もあわせて記すことにした。

第２章　位置と環境

泉大津市は、大阪平野の南部で大阪湾に面する位置にあり、北は高石市、東は和泉市、南は泉北郡忠岡町と接し、南北に長い市域を有している。

本遺跡は、泉大津市の東部にあたる豊中に所在し、国鉄阪和線和泉府中駅より北へ 1,200ｍ、南海本線泉大津駅より東南東の方向へ 1,500ｍの地点にほぼその中心を置く。そして南北約 400ｍ、東西約 300ｍの範囲の遺跡である。府立泉大津高等学校は、この遺跡の南西部にあり、同校敷地内にもその範囲はおよぶ。

この遺跡の位置を地形的に見ると、大阪府と和歌山県の境界をほぼ東西に和泉山脈が走り、その北側にいくつかの丘陵が伸びている。信太山丘陵もその一つで、この信太山丘陵より更に西に派生した舌状の微高地がある。その北西端で、標高約９ｍ～14ｍの間に本遺跡が存在する。付近には、大きな河川はなく、溜池が多く存在するのもこの地方の特色である。しかし現在では、その大部分が埋められて消滅してしまった。現地表下には幾本もの砂礫層が、ほぼ南北方向に走り、地下水位も比較的浅く、以前には湧水の箇所が多く見られた。その為、農業生産の場として古くから開け、条里制遺構もよく残されている。気候は温暖であり、降水量も概して少ない。

このように、この地方は生活条件に適しているため、人々の出現は早いものと思われる。第二阪和国道予定路線内及び、上池に於いて縄文式土器が発見され、縄文時代にはすでに人々が生活していたことをうかがい知り得る。

弥生時代になると、周辺部に於いて、集落が形成された。西方約 700ｍの池浦遺跡[5]は第Ⅰ様式中～新の時期及び、古墳時代の遺跡である。東方の池上遺跡は、第Ⅰ様式新～第Ⅴ様式そして平安時代へと続くものである。規模は南北約 500ｍ以上、東西約 800ｍ～ 1,000ｍの範囲を有し、とりわけ弥生時代の遺跡としては、日本最大級のものであることが、現在までの調査で明らかにされてきた[6]。丘陵上に存在する遺跡として、和泉市信太山丘陵の惣ケ池遺跡[7]や、同市観音寺山遺跡[8]が報告されており、和泉地方に於ける弥生時代高地性集落を解明する貴重な資料となっている。

南に接する豊中遺跡[9]は、古墳時代初期から中世に至る集落跡で、庄内式以降の

時期の土師器を出土し、それに伴う住居址も発見され、弥生時代から古墳時代へ移向する間隙を埋める遺跡である。

七ノ坪遺跡から豊中遺跡にかかる一帯は、条里制遺構がよく遺存されており、四ノ坪・六ノ坪・七ノ坪・十七・十八・三十内の坪名の他にも、大福寺の字名が残されている。この場所は現在倉庫が建っているが、付近から出土した瓦片より、平安時代末～室町時代にかけての寺院が存在していたと考えられる。

七ノ坪遺跡・豊中遺跡周辺では古墳は見あたらないが、北東方向約 3.5kmの信太山丘陵北端には黄金塚古墳⑩が、又南約３kmには岸和田市摩湯山古墳⑪が前期の前方後円墳として存在し、和泉市丸笠古墳も前期古墳として考えられている。中期になると、帆立貝式である貝吹山古墳が、後期には富木車塚古墳⑫が出現する他、信太山丘陵には信太千塚⑬が形成されるようになる。

第３章　遺　　構

泉大津市豊中 604－２他２筆（八木第一次調査）

当該地区は、土地所有者八木宗雄氏より、当地に住宅建設の意向を示され、それに先だって、緊急発掘調査を26ｍ×15ｍの範囲で行なった所である。

まず東西方向に試掘坑を掘った結果、表土下70cm～90cmに於いて、灰褐色粘質土層と灰黒色粘質土層に土師器を含む遺物包含層を見いだした。よって上記の範囲で全面を掘り下げることとした。

耕土は約22cm、床土約13cm、茶灰色土が約15cmで南へ行くにしたがって層の巾が薄くなっている。その下に黄灰色土層が約15cmあり、紫褐色の班点が混じり、やや砂っぽい層である。その下層は約５cmで上層より灰色が強く、やはり紫褐色の班点が見られる。この二層は漸移的に色が変化しており、明確な境の線は出ない。その下層は、灰褐色粘質土層、灰黒色粘質土層が、それぞれ５cmの厚さで堆積している。遺物包含層はこの層までで、土師器片が含まれていた。この二層は北へ行くにしたがって色が薄くなり、漸移的に少し灰色の混じった茶褐色粘質土層になる。灰褐色粘質土層には一部炭の混じった部分が見られた。更に下は、灰黄色の砂質土層が35cm以上存在している。

不明ピット

調査地域の北西隅で、灰黄色の砂質土面に、約２ｍ50×３ｍの方形に灰黒色土が入っていた。東辺はややふくらみを持ち、西辺はわずかに確認できる程度である。北辺は調査範囲がら外れる為不明である。この灰黒色土を除去すると、東辺部で約２cm～３cm落ち込み、南西部へ行くにしたがって浅くなっている。下面には、直径約15cm～20cmのピットが４cm～15cmの深さで４個検出できた他、北辺際で２cm～５cmの深さの不整形のピットが１箇検出された。又中央部付近では、直径30cmの範囲でわずかに焼土が見られた。この遺構は、遺存状態が悪いため、どのような性格のものであるかよくわからないが、住居址の可能性はまずないであろう。

溝

調査地の中央部、表土より約90cm下で、灰黒色土と灰褐色土が、ほぼ南北に走る一線を境として存在する。西側に灰黒色土で、東側が灰褐色粘土である。ここに巾60cm、深さ１ｍ70、長さ４ｍ80と、巾60cm、深さ80cm、長さ７ｍの二本のトレンチを東西方向に平行して掘った。その結果、東側の部分、すなわち灰褐色粘土は溝の堆積層であることがわかった。この溝は、北側で二方向に分かれている。溝は灰白色粘土を西側の肩にし、50cm～60cm下り砂利層へと続く。堆積層は灰黒色粘土で、灰白色（粗）砂、黒色粘土が間層として存在する。東側は灰色粘質土を肩とし、弥生式土器・土師器及び植物遺体が検出された。溝巾は約５ｍである。

泉大津市豊中 477－１

本地区は、七ノ坪遺跡の南端にあたる部分である。住宅建設に先立ち盛土がなされており、調査時に於ける土置場の必要性から、全地域を同時に調査することは不可能であるため、２回にわけて調査した。

第一次調査（図版第３、９）

表土（盛土）、旧耕土、床土を除去後、茶褐色粘質土層があらわれた。この層は、土師器片、須恵器片、瓦器片を多数含んでいたが、遺構は存在せず、更に下

層である黄灰色砂質土を出すにいたった。なお旧耕土から、この層まで約30cmである。

黄灰色砂質土層は、ほぼ調査地域全域に広がり、土師器片の散布がみられた。この面に於いて、ピット、溝、溝状遺構を確認した。

ピ　ッ　ト

東側すなわちＢＹ３、ＯＹ２付近に集まっている。これらのピットの中には土師器片が入っており、特にピット№８には土師器高坏の坏部のみ完形が入っていた（図版第９）。これら土師器は布留式土器と呼べるものである。ピット№２・４・８は一列に並び、第二次調査の№９へと続く。相互の間隔は約２ｍである。

溝（図版第10）

ＡＷ１の地点で、東西方向に流れる溝を確認した。この溝の規模は、巾90cm、深さ約40cmでコブシ大の石が、ほぼ溝中全体に散らばっていた。堆積層は三層よりなっており、上層は灰黒色粘土、下層は灰褐色粘土で、その中間層は、灰黒色粘土と灰褐色粘土の混じった層である。出土遺物は、高坏・壺・甕・鉢等が出土しており、完形の壺（表紙写真）も見られた。布留式に属する。

溝状遺構（図版第11）

この遺構は、調査地域東側に於いて三方向より走り、ＯＹ２とＢＹ３の中間付近で一本に集まり、西方向へ伸びてゆく。この中からは土師器片が多数出土したが、Ｏ×２で中世の瓦製羽釜の一個体分が、この遺構の底部より浮いた位置で検出された（図版第11、図版第15・26）。他の土師器片は、確認できるものでは布留式に属するものである。

第二次調査（図版第４、12）

第一次調査の東側で13ｍ×15ｍの範囲である。黄灰色砂質土面にピット及び砂礫層が存在する。

調査地の西側部分でピットが10数個検出された。しかし、それぞれの関連性は

不明である。ただピット№9は第一次調査の時のピット№2・4・8と一列に並ぶものであるが、どういう性格のものであるか不明である。ピット№19・20・21は不整形なピットである。

調査地面積の大部分が砂礫層であるため、巾40cm、深さ60cm、長さ10m50のトレンチをほぼ東西方向に堀ったが、砂層及び砂礫層が全面に見られ、遺物は検出できなかった。

泉大津市豊中 444－1　（八木第二次調査）

今回の調査は、宅地造成に先立つもので、原因者負担による調査である。八木第一次調査地点より西南へ60m、七ノ坪第五次調査地⑭点より北東へ80mの位置にある。

調査は、現地表面（耕土、床土）約20cmを除去すると、黄灰色粘質土が現われた。この層中には、若干の土師器片・須恵器片・瓦器片が含まれていた。これは後世の攪乱によって混入されたものである。ここまで掘削した時点で、南側に深さ約 160cmのトレンチを掘った。その結果、河川状遺構が2本現われた。これは現地表面より約50cm下よりはじまるものである。黄灰色粘質土層の下に茶褐色土が存在する。この層中より、弥生時代に属するであろう石槍が1本出土した。

現在、溝上層部を調査中につき、くわしい報告は次回にゆずるとして、ここでは南側トレンチに於ける溝の断面観察にとどまる。なお溝は、東側をA溝、西側をB溝と名付ける。

A　溝

東部分に位置するA溝は、南北方向に走り、溝巾5m、深さ 1.2m以上である。溝内上層において、茶褐色粘質土が存在し、中央部でU字形に礫層が入り込む。下層部に於いては、灰色砂層、暗灰色粘土層などが堆積している。上層では土器の包含はほとんど見られず、下層部においても同様である。しかし下層部砂層内、粘土層内において弥生式土器が発見された。

B　溝

A溝西肩部分より、4m西の位置にある。流路は、A溝同様南北方向で、溝巾5m、深さ2m以上である。溝内上層の灰黄褐色土の上面より、後世において掘り込まれたと考えられる、土坑状の遺構が見られた。この層において、遺物の包含は全く見られなかった。下層部の灰色砂層内において、土師器片が多数出土し、復元可能な個体もあった。また土器片と共に、多くの木片（流木）、植物の種子なども検出された。出土した土師器は布留式と呼ばれるもので、小型丸底壺、鉢等の種類がある。

第4章　遺　　物

泉大津市豊中 604－2他2筆　（八木第一次調査）

甕　（図版5・1）

口径20cm、器形は完残せず、口縁部と体部が少し残るだけである。胎土は、砂粒が多く軟質である。口縁は、外上方へ広がり、口縁端部で上方へやや立ちあがる。又口縁に、ナデによるゆるい段がついている。胴部は丸く、整形は、タタキ目仕上げで、頸部近くにかけて、縦の刷毛目がある。底は丸底になっている。口縁部から胴部にかけて煤の付着が見られる。

甕　（図版5・2）

口径18cm。口縁部、胴部の⅓が残存している。胎土は砂粒が比較的少なく、硬質である。口縁は、外反し端部はやや丸味を持つ。胴部はやや丸味を持つが、最大腹径は上位にある。整形は、口縁部では横ナデ、胴部では、指の圧痕の上に軽く横ナデを施し、その上にタタキ目を入れ、更に刷毛目で仕上げている。

甕　（図版5・3）

口径約15cm。現存高14.5cm。胎土に砂粒を含む。口頸部は短かく外反し、端部は軽く凹面をなす。胴部は丸く最大径は中位にある。頸部に横方向のナデ、肩部より下に縦方向の箆ガキが行なわれている。内面は、胴部と頸部の接合部が明瞭に残っており、ナデによる整形が施されている。胴部に煤付着。

壺　（図版５・４）

口径約15cm。器高25.8cm。畿内第５様式である。胎土は精成した粘土を使用。口頸部は、軽く外弯しやや長い。胴部は下ぶくれの丸味を持ち、最大腹径は下位にある。底は平底を呈し、比較的大きい。全体の整形は、縦方向の箆ミガキで入念に仕上げられている。

壺　（図版５・５）

胴部と底部のみ現存する。その形態より、壺４と同器形と思われる。胎土は精成した粘土を使用している。縦方向の箆ミガキが施され、入念に仕上げられている。底は平底を呈し、厚い。

壺　（図版５・６）

弥生式土器、長頸壺の破片と思われる。口径は推定約22cm。胎土は精成した粘土使用。頸部はゆるやかに外反し、口縁部端面は凹面をなす。整形は、口縁部でナデによる仕上げ、頸部で細かい縦方向の箆ミガキ。内面は横ナデの上に、横方向の刷毛目を施している。

高坏　（図版５・７）

坏部口縁径約17cm。坏部高さ 6.5cm。脚部は欠損のため不明である。坏部はやや内弯する底部に、外反する口縁部を接合し、明瞭な稜線が走る。整形は、底部外面で横方向の箆ミガキ、口縁部では櫛ガキによる文様を二段にめぐらしている。内面は横方向のナデによる仕上げである。

高坏　（図版５・８）

脚部のみ現存する。裾部径約16cm。高さ約10.5cmで裾部にかけてラッパ状に広がる。胎土は精成した粘土使用。全体に縦方向の箆ミガキで入念に仕上げられている。柱状部外面は、櫛ガキ文様を四段めぐらされている。

泉大津市豊中 477－１

甕　（図版６、図版13・10）

胴部のみで上部は欠損している。中央部よりやや下に接合部あり。上部は左下りの、下部は水平方向のタタキ目整形を施す。底部は突出する平底である。

甕　（図版６、図版13・11）

口径16.1cm。器高現存高13cm。頸部は「く」の字状に屈曲し、短かく外反する。胴部はやや長めで平底であると思われるが、下部欠損の為不明。胴部外面は左下りの粗いタタキ目整形、内面は横方向の刷毛目を施す。口縁部内外面とも横方向のナデによって仕上げられている。

甕　（図版６、図版13・12）

口径推定約18cm。高さは胴下半部欠損の為不明。頸部は短かく「く」の字状に外反し、端部は肥厚する。胴部は球形に近い。口縁部内外面とも横方向のナデによる仕上げ。胴部外面は刷毛目で整形が施されている。

壺　（図版６、図版15・８）

口径推定約21cm。肩部より外反する頸部は、中央付近でするどく屈曲し、稜線が走る。いわゆる二重口縁の大形壺である。頸部外面下位に箆による刻み痕がある。全面に縦方向の箆ミガキ、内面は横方向の刷毛目が施されている。

壺　（図版６、図版15・13、14）

口径10.8cm～18.8cm。13はゆるやかに外湾し、端部は丸味を持つ口頸部分。14はわずかに内湾するが、ほとんど直線的である口頸。胴部は欠損のため、不明である。

壺　（図版６・15　、表紙写真）

口径約12cm。器高15.6cm。口頸部は斜上方に直線的にのびる。胴部最大腹径は中位より上にあり肩が張る。底部は平担となる平底である。整形は、外面では剝離のため不明であり、内面は刷毛による仕上げが施されている。

壺　（図版６、図版13・16）

口径14.2cm。器高24cm。口縁部は斜上方に直線的にのびる。胴部の最大腹径は下位にあり、下ぶくれの形を呈する。底部は小さな平底を持ち、中央部がわずかにくぼむ。内側は若干あげ底状となる。外面は刷毛目整形を施す。

高坏　（図版７、図版15・17、18、20）

坏部口縁径16.2cm～18.9cm。全体に外広がりであるが、20はやや口縁端部で外に返り気味。17、18は比較的硬質で、やや薄く作られている。20の整形は刷毛による仕上げ。17、18は箆ミガキによる仕上げである。

高坏　（図版７、図版14・21、26）

脚部のみ現存する。裾部径10.1cm～14.8cm。脚高 7.8cm～９cm。中空となる柱状の長い脚である。21は中央部がややふくれている。内面は箆削り痕が残る。26は内面にしぼり痕が認められる。

高坏　（図版７、図版14・22、23、24、25）

脚部のみ現存する。裾部径 9.1cm～11.1cm。脚高 5.1cm～ 9.9cm。坏部との接合部分より裾部にラッパ状に広がる。22、23は裾部に３孔を持つ。24、25は上部中味はつまっており、24では、屈曲気味に広がる。

文　　献

① 森浩一編　「和泉の古代遺跡」（和泉考古学第５号）1961

② 中井貞夫　「七ノ坪遺跡発掘調査概要」（大阪府教育委員会）1974

③ 石部正志　「七ノ坪遺跡試掘調査報告」（和泉考古学第６号）1974

④ ②と同じ

⑤ 中井貞夫　「泉大津市・池浦遺跡発掘調査概要」（節・香・仙第22号）1972

⑥ ①と同じ

森浩一編　「和泉考古学第１号」1954

「池上・四ツ池」（第２阪和国道内遺跡調査会）1970

「第２阪和国道内遺跡発掘調査報告」１・２・３合冊（第２阪和国道内遺跡調査会）1973

「第２阪和国道内遺跡発掘調査報告」４（第２阪和国道内遺跡調査会）1971

⑦　石部正志　「鶴山地区、信太山遺跡（その２）調査概報（和泉市教育委員会）1970

⑧　森　浩一　鈴木博司　「観音寺山弥生集落調査概報」1968

⑨　坂口昌男　「豊中・古池遺跡発掘調査概報」その１　（豊中・古池遺跡調査会）1973

〃　「豊中・古池遺跡発掘調査概報」その２　（豊中・古池遺跡調査会）1974

⑩　末永雅雄　島田暁　森浩一　「和泉黄金塚古墳」1950

⑪　梅原末治　「摩湯山古墳」（大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第３輯）1932

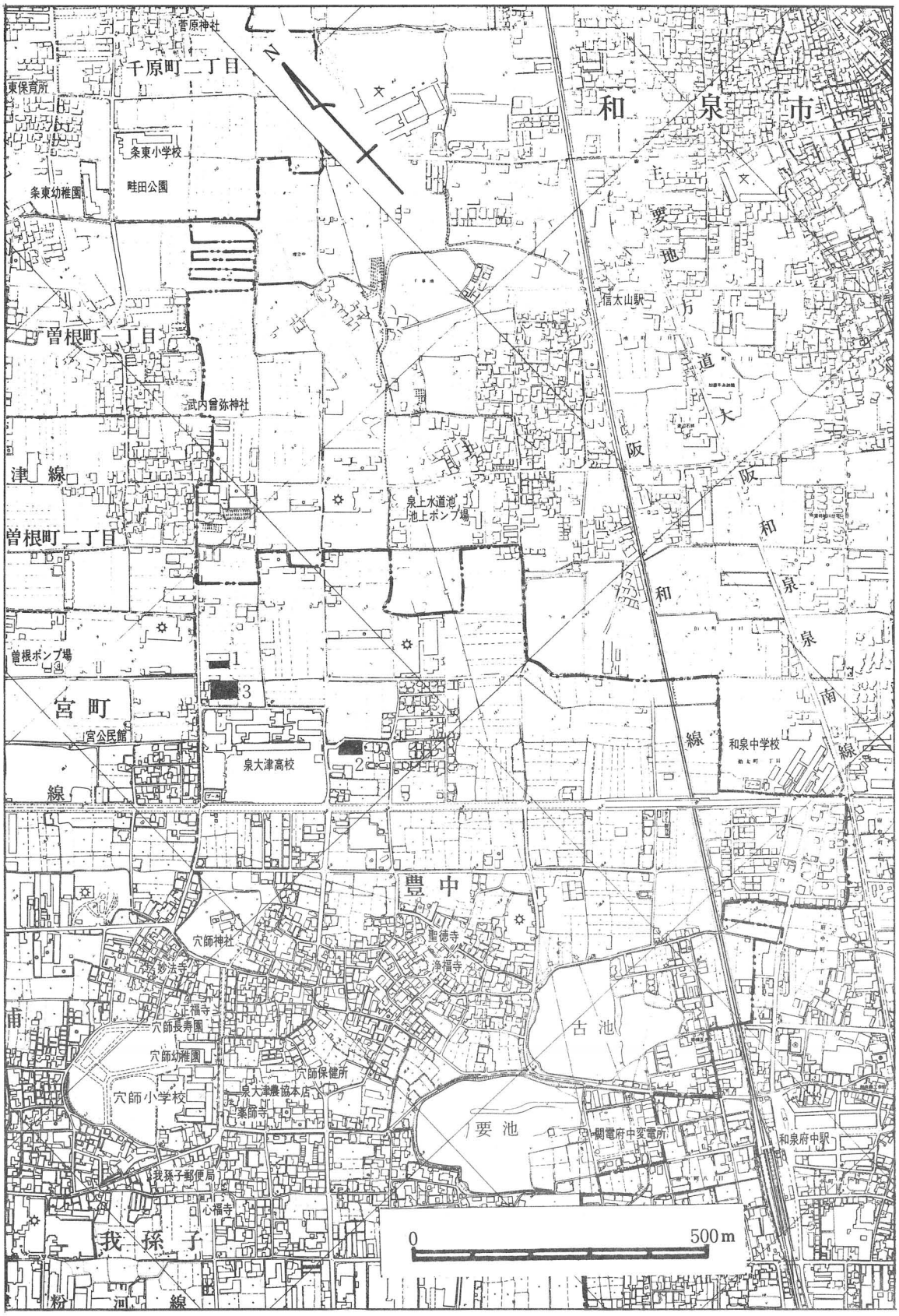
⑫　上田宏範　森浩一　藤原光輝　秋山進午　宇田川誠一　「富木車塚古墳」（大阪市立美術館学報第３集）1960

⑬　森　浩一　「和泉信太千塚の記録」（泉大津高校地歴部）1963

⑭　②と同じ

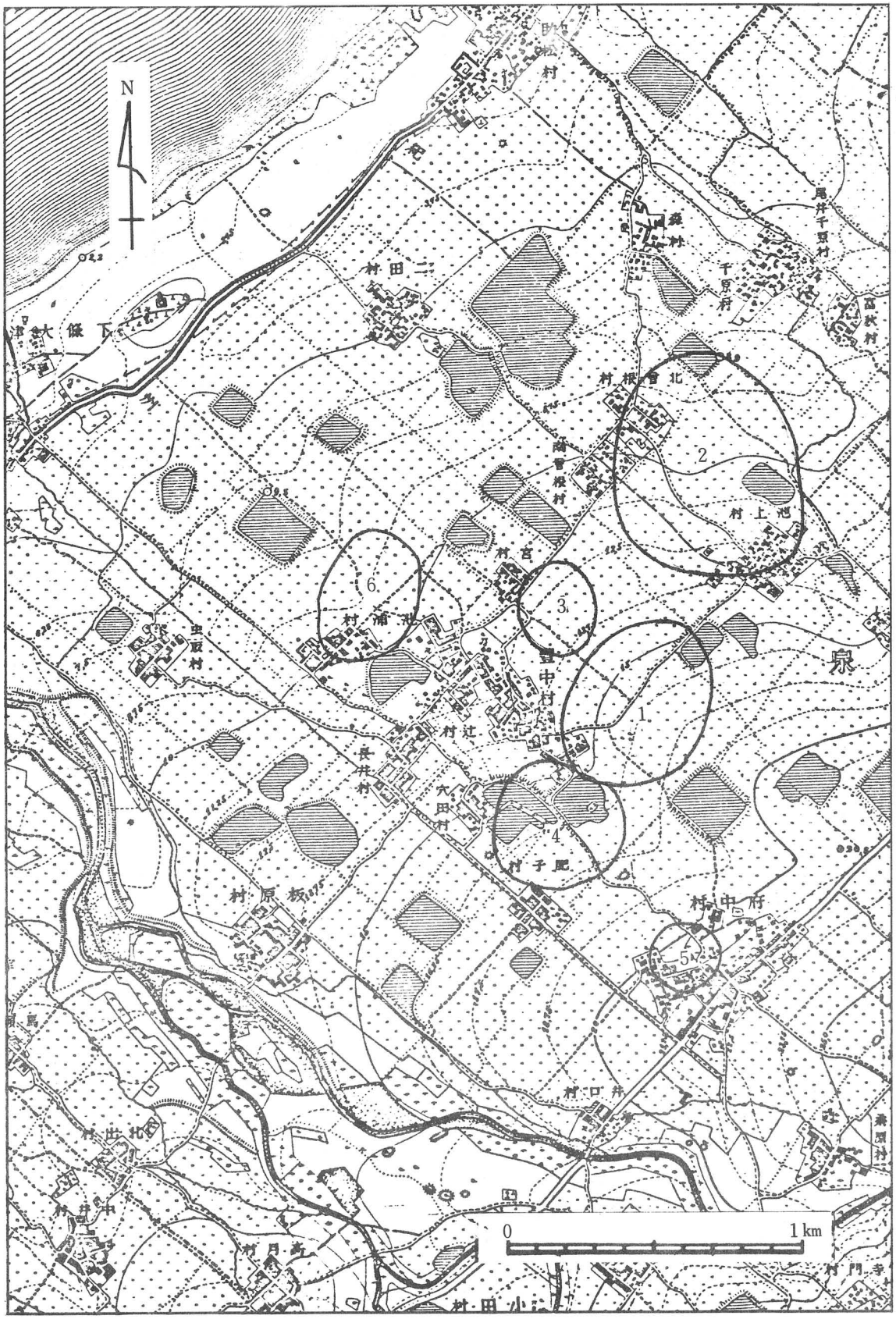
図　　版

図版第一

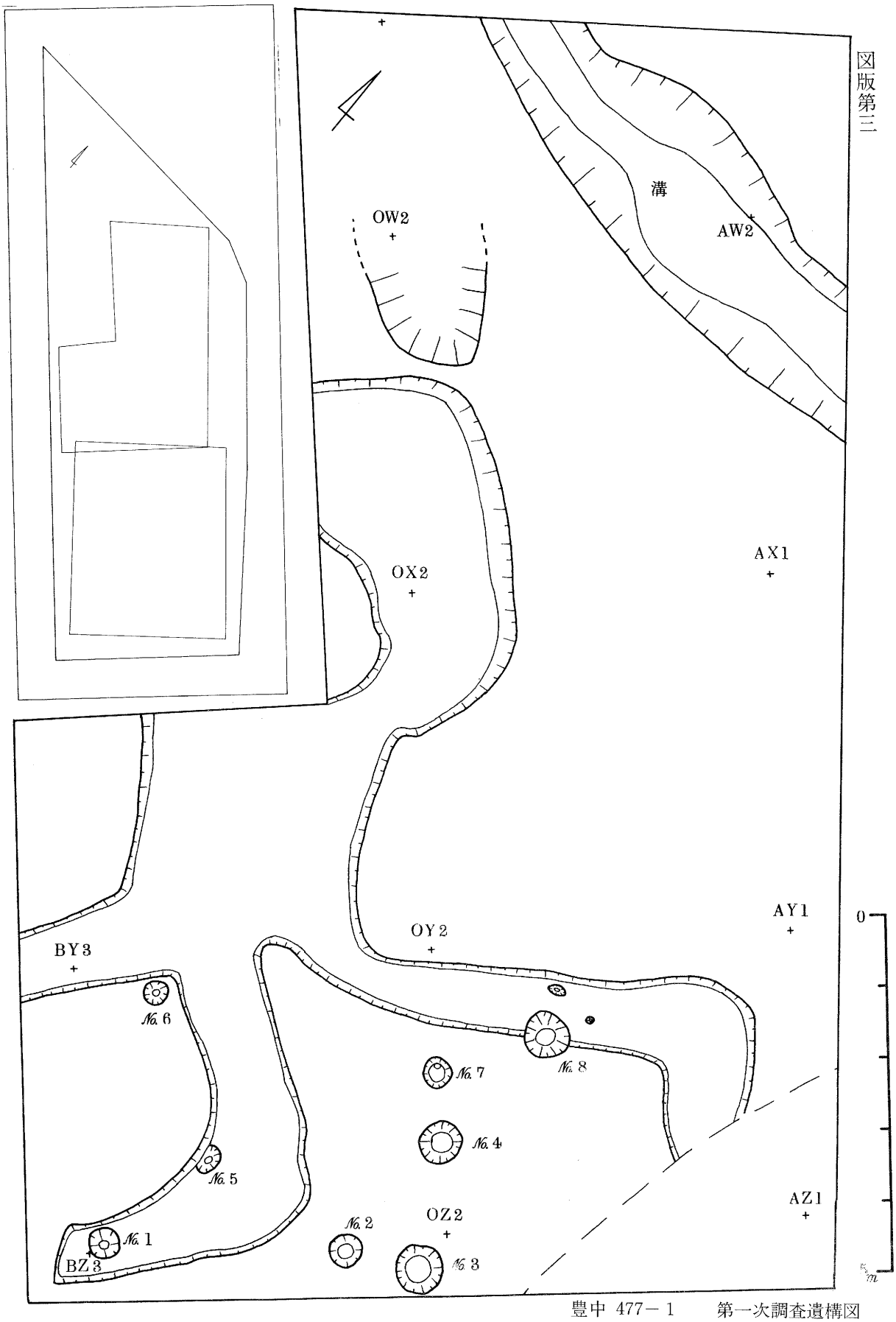


①豊中 604－2他2筆　②豊中 477－1　③豊中 444－1　調査地

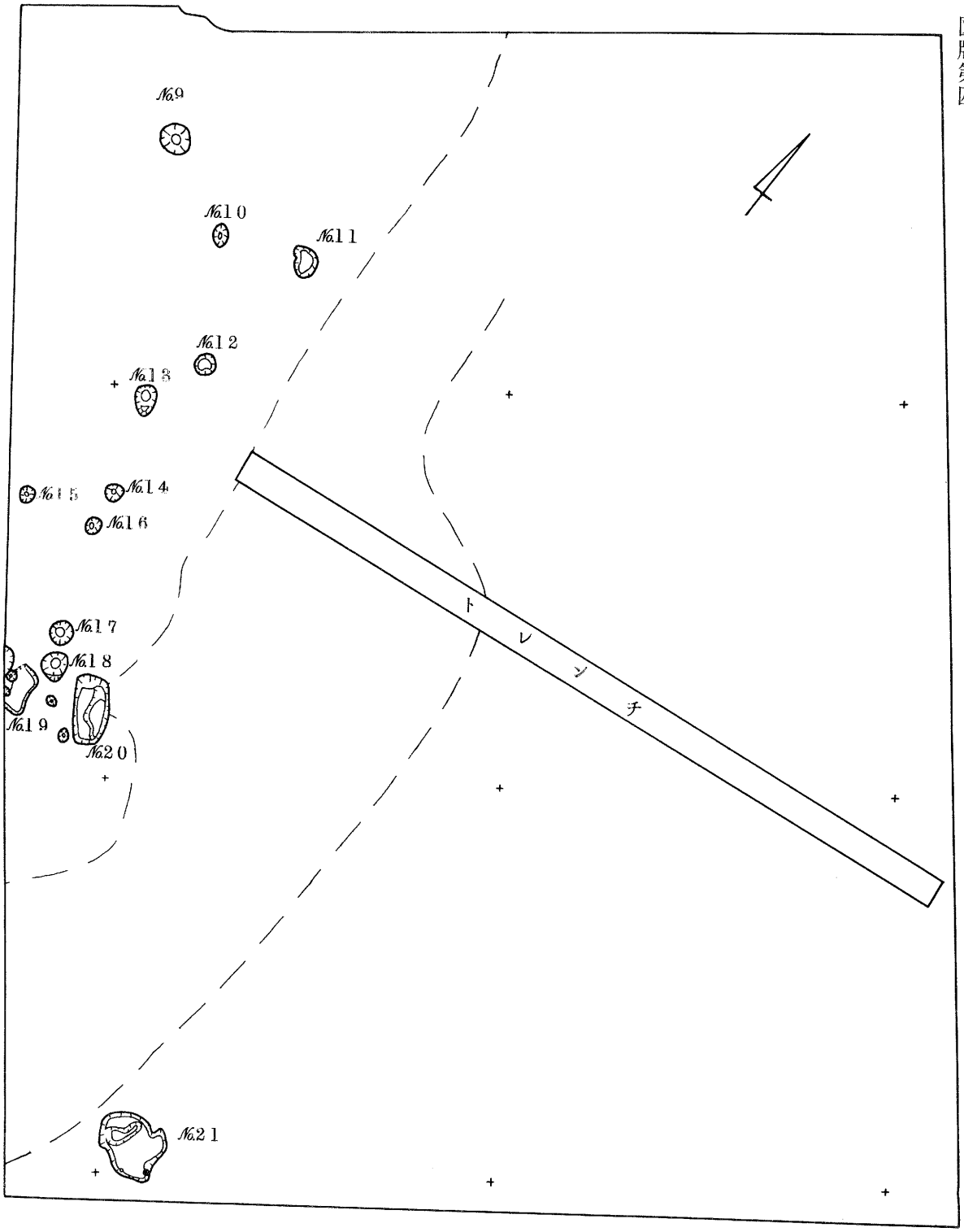
図版第二



1. 豊中遺跡　2. 池上遺跡　3. 七ノ坪遺跡　4. 古池遺跡　5. 和泉国府跡　6. 池浦遺跡　周辺の遺跡

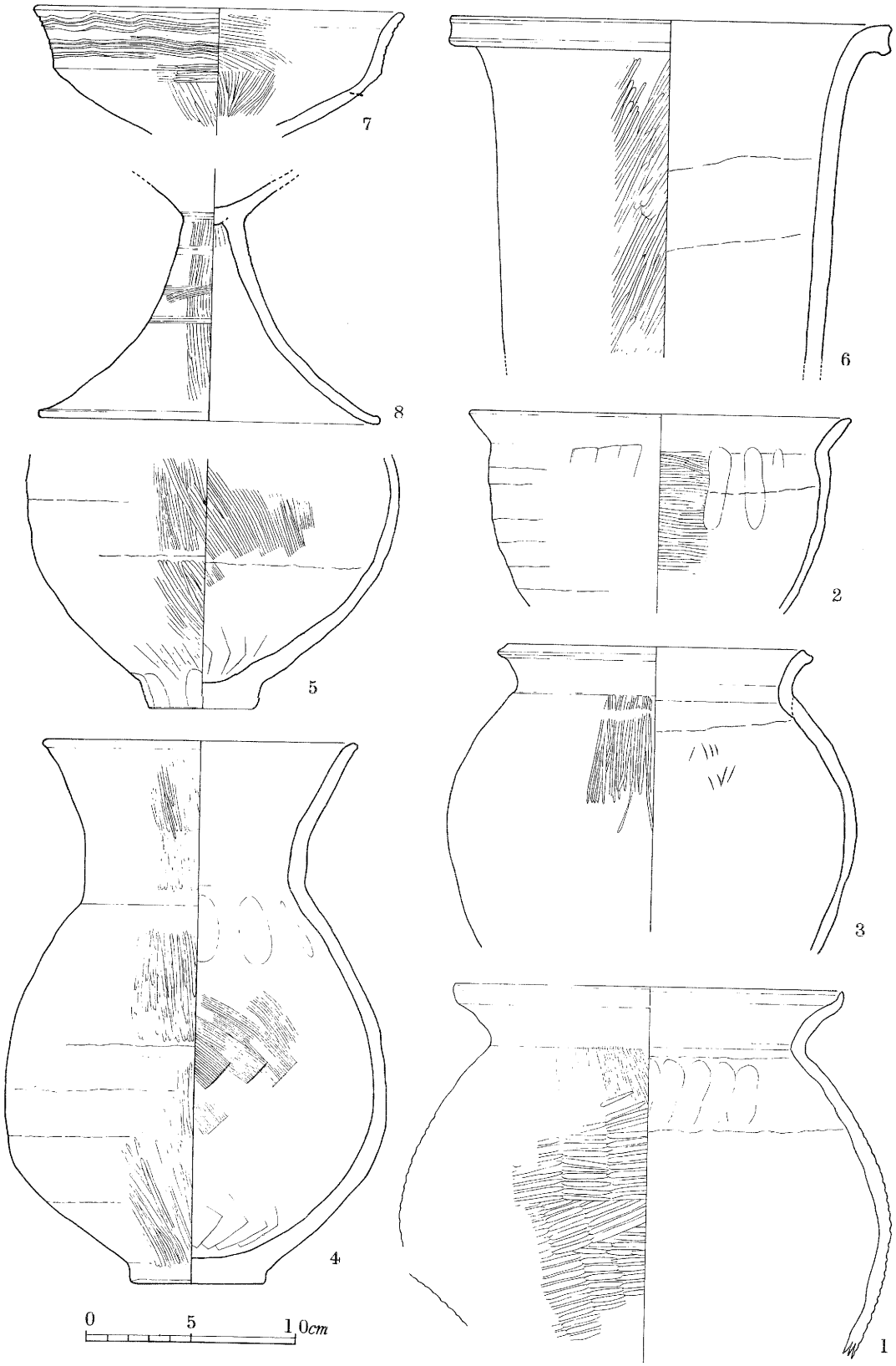


豊中 477－1　　第一次調査遺構図

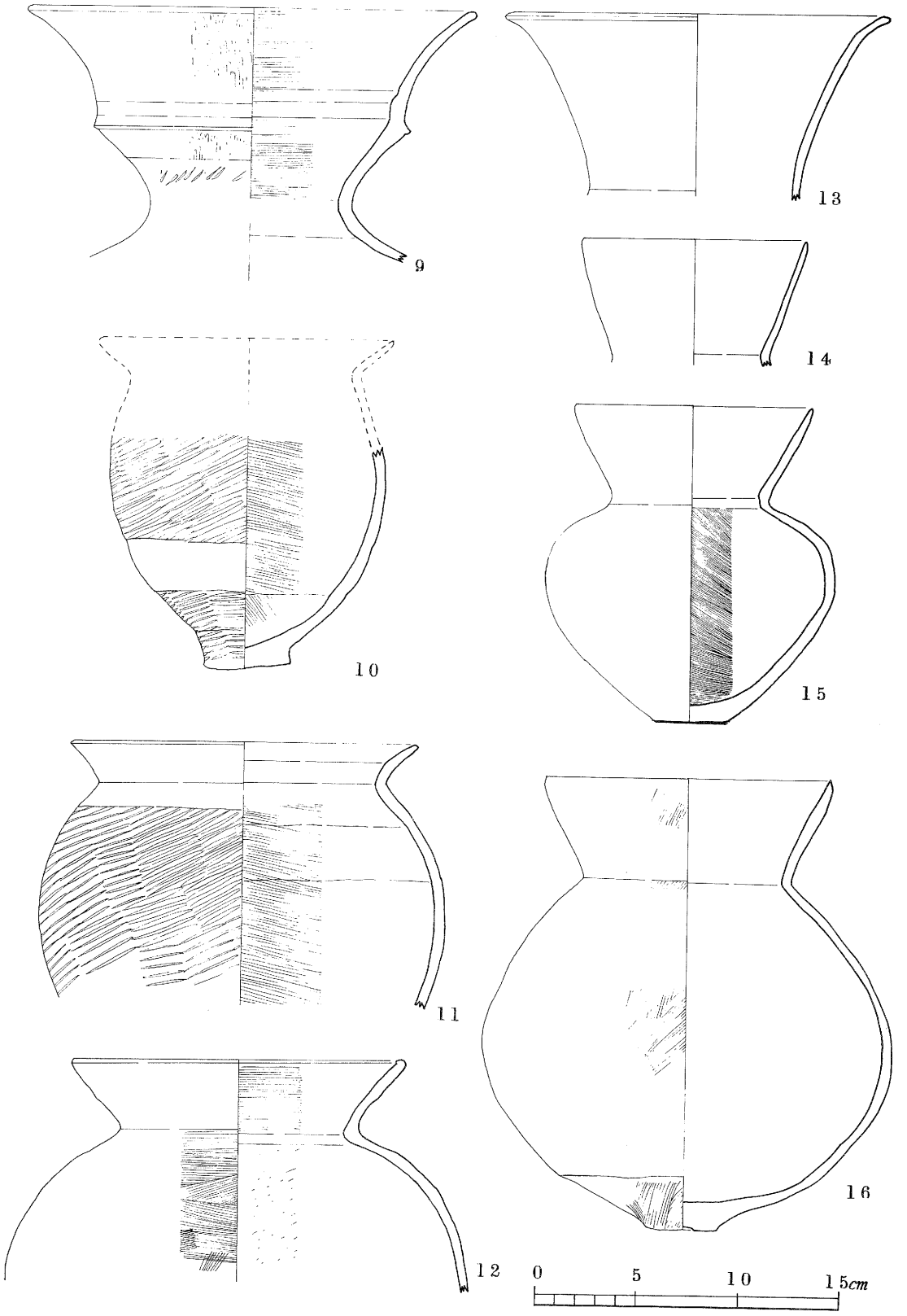


0　5m

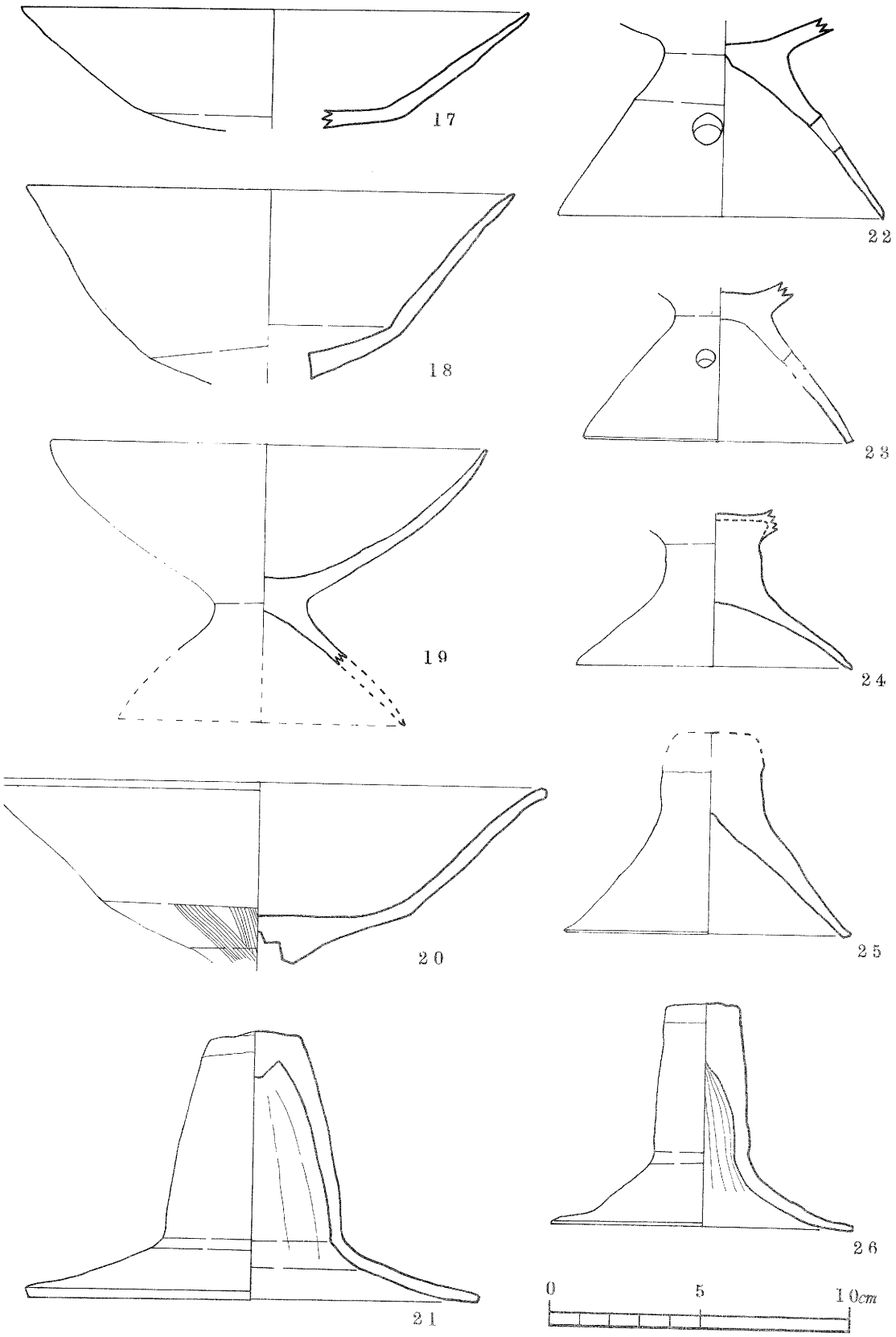
豊中 477－1　　第二次調査遺構図



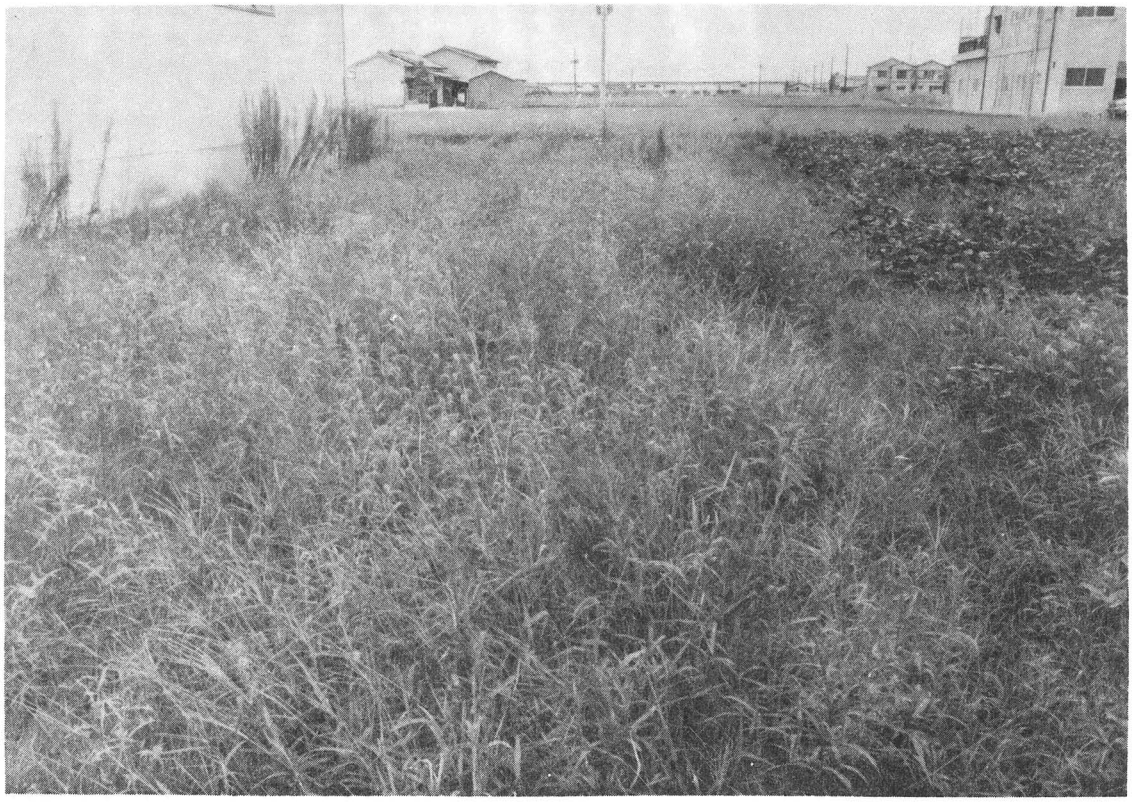
豊中 604－2他　　土器実測図



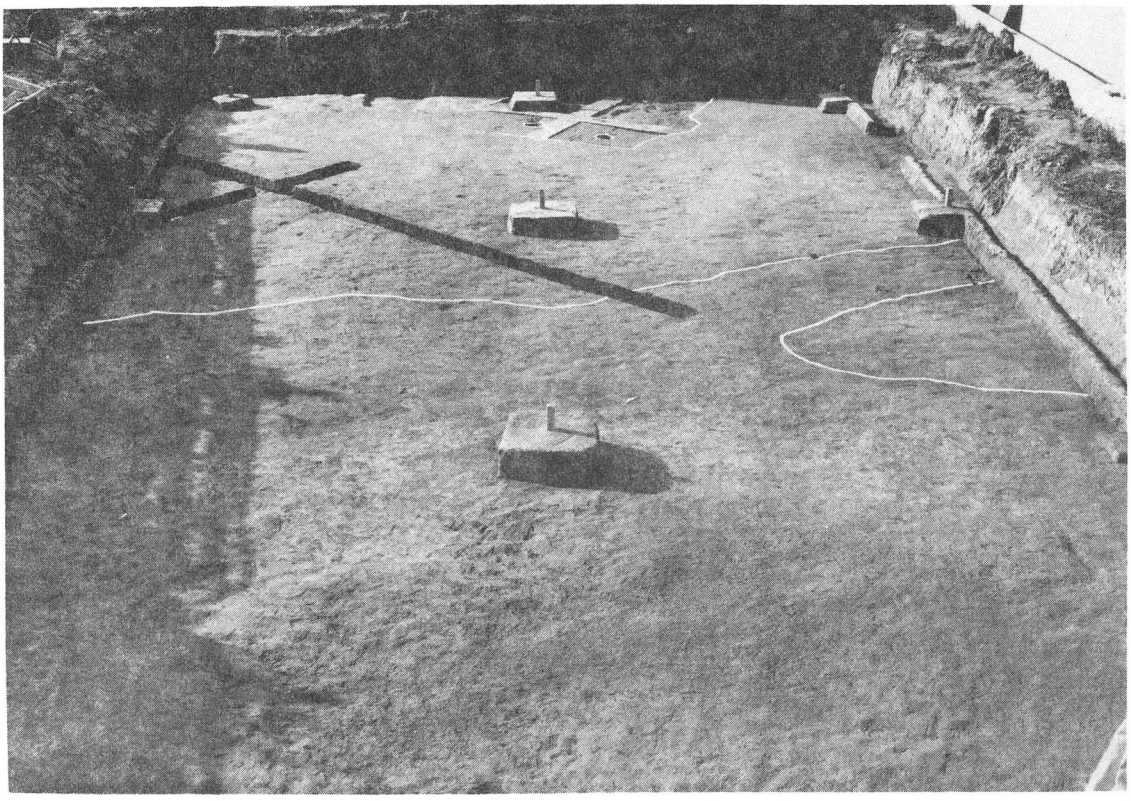
豊中 477－1　土器実測図



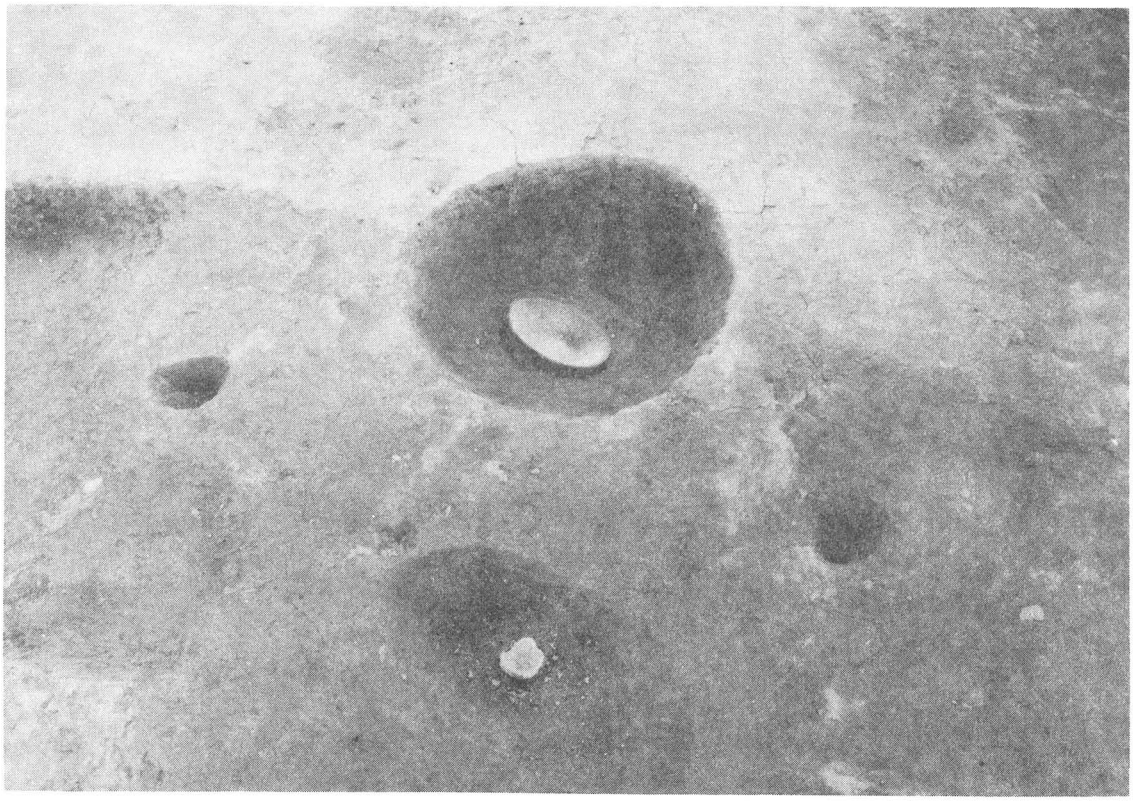
豊中 477－1　　土器実測図



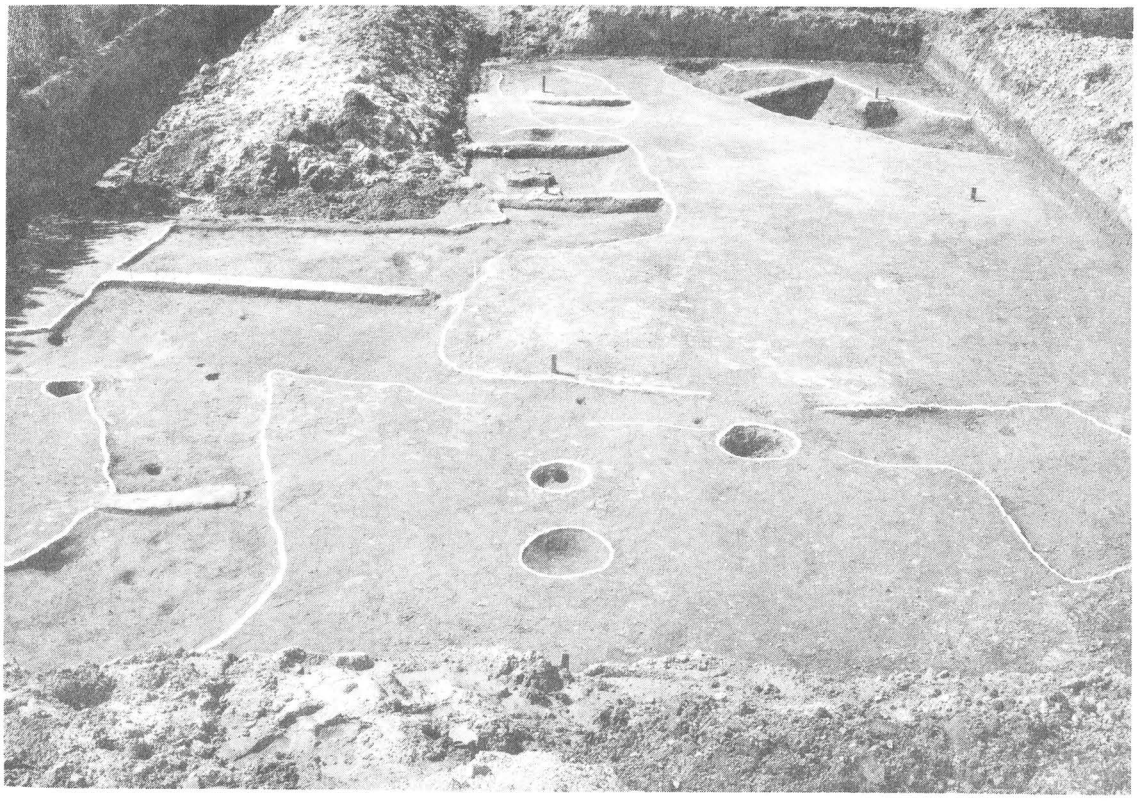
豊中 604－2他　調査前



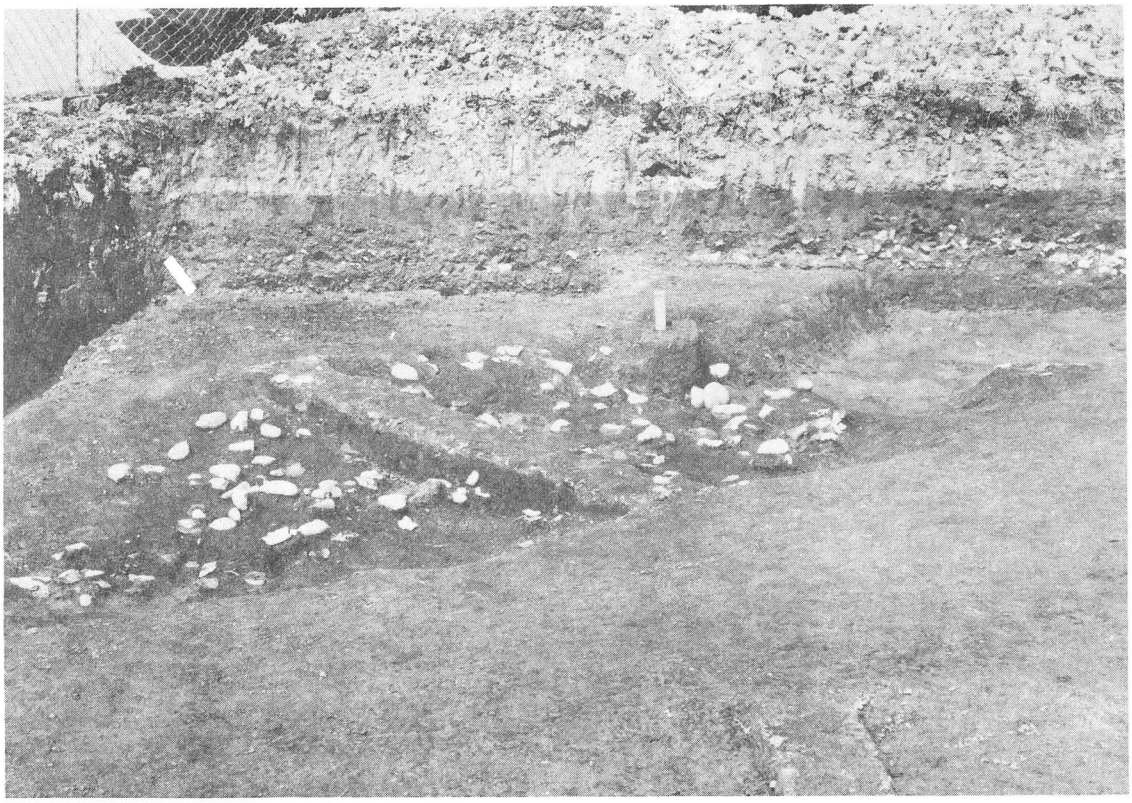
豊中 604－2他　全景



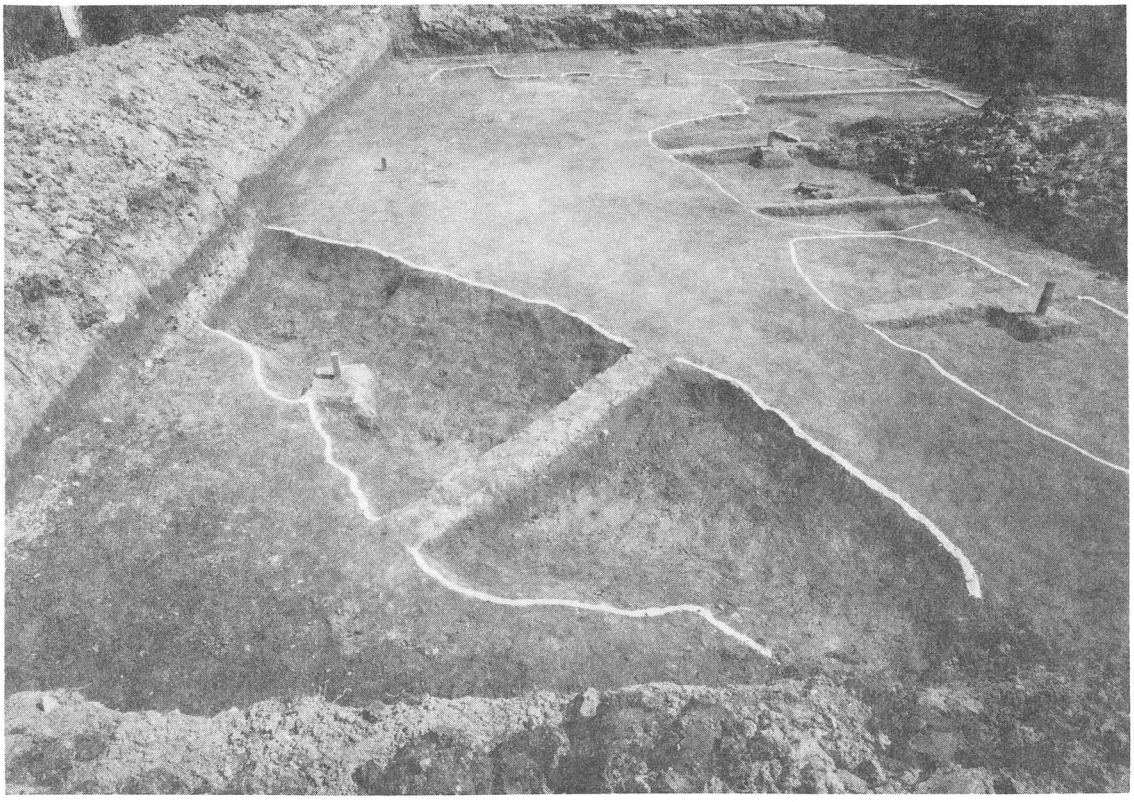
豊中 477－1　第一次調査ピットNo.8



豊中 477－1　第一次調査　全景



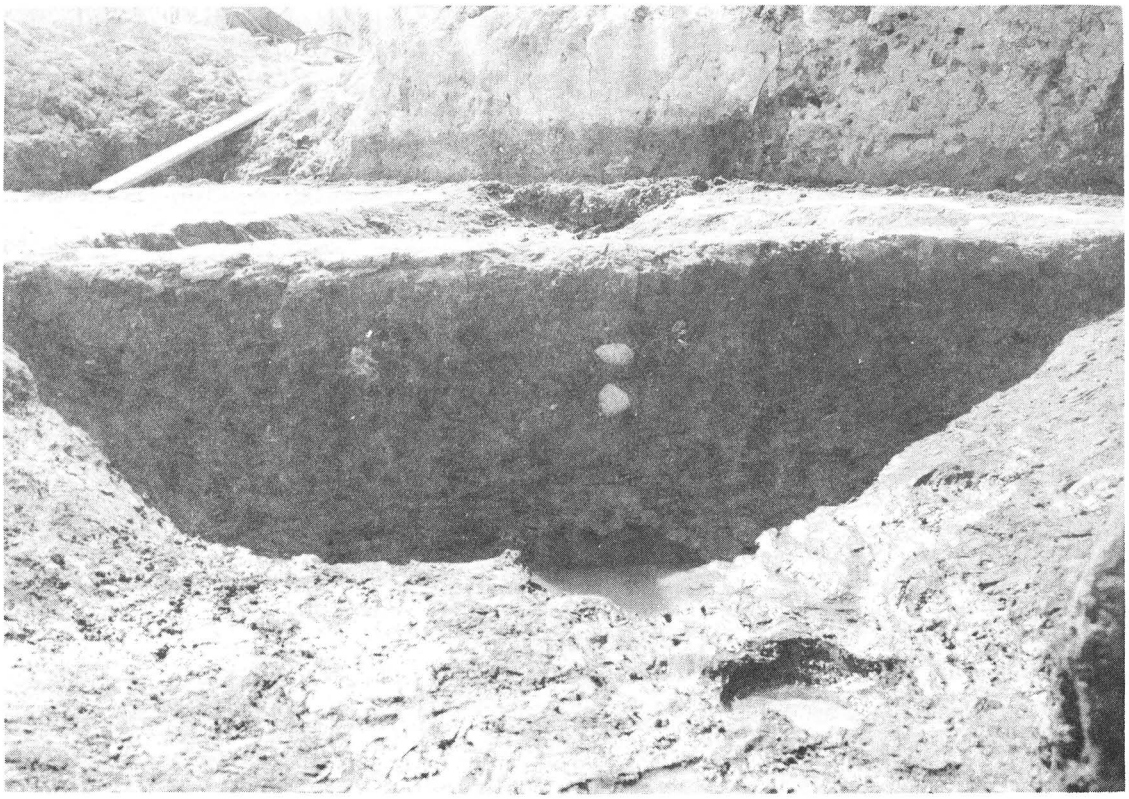
豊中 477－1　第一次調査　溝内出土状態



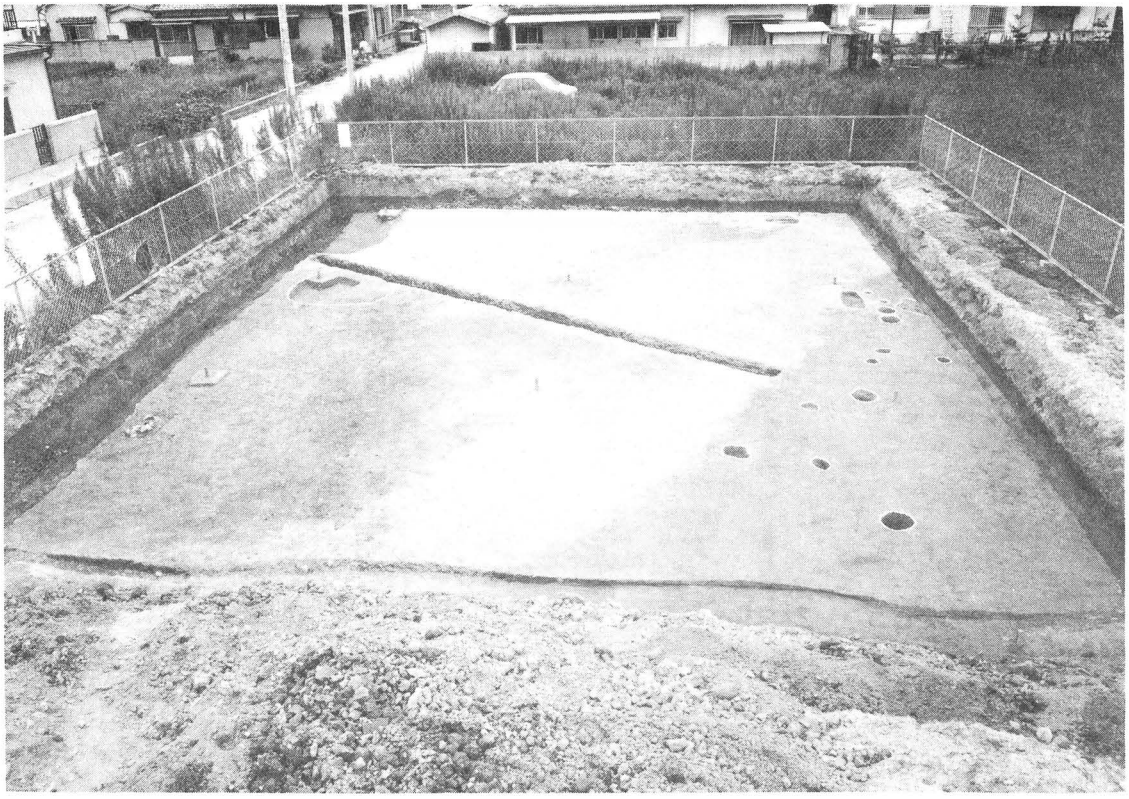
豊中 477－1　第一次調査　溝

豊中 477－1　第一次調査　羽釜出土状態

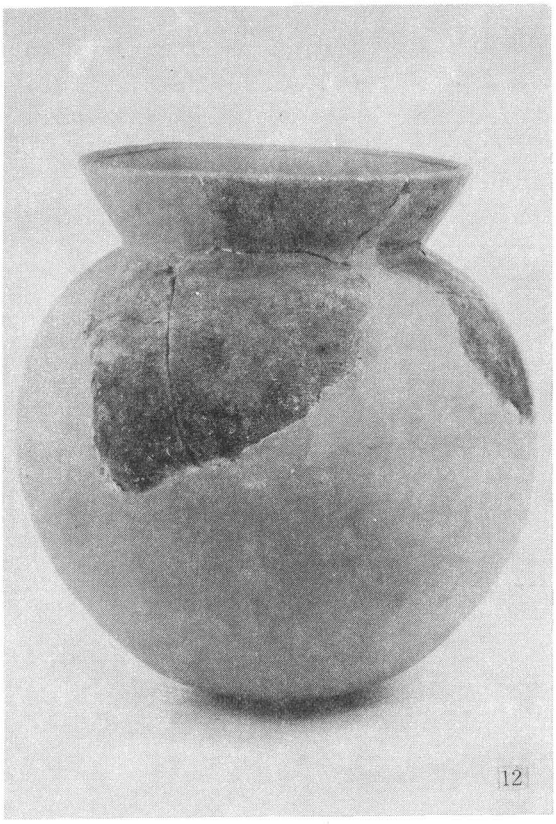
豊中 477－1　第一次調査　溝状遺構

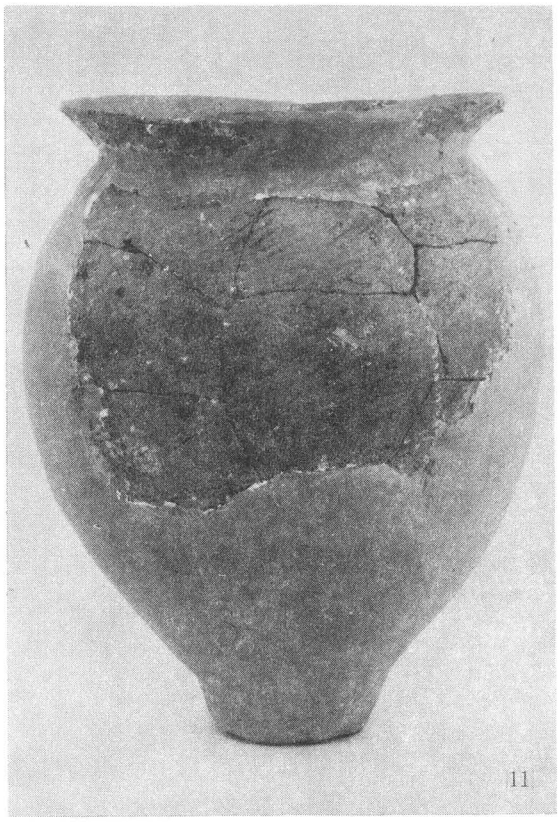


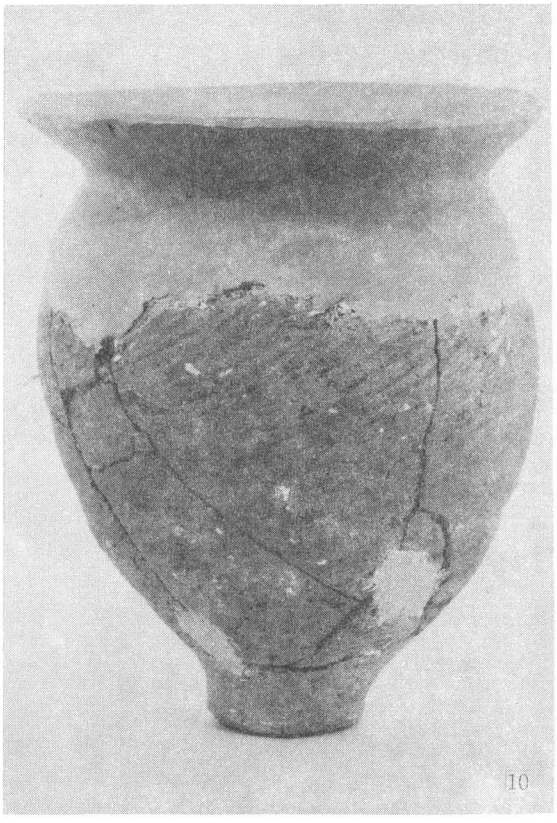
豊中 477－1　第一次調査　溝断面



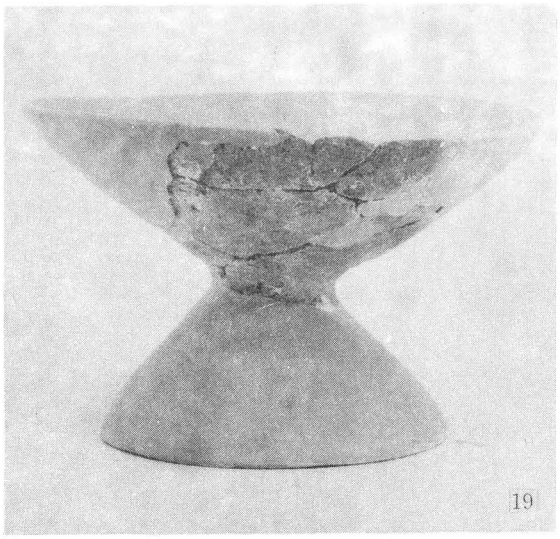
豊中 477－1　第二次調査　全景

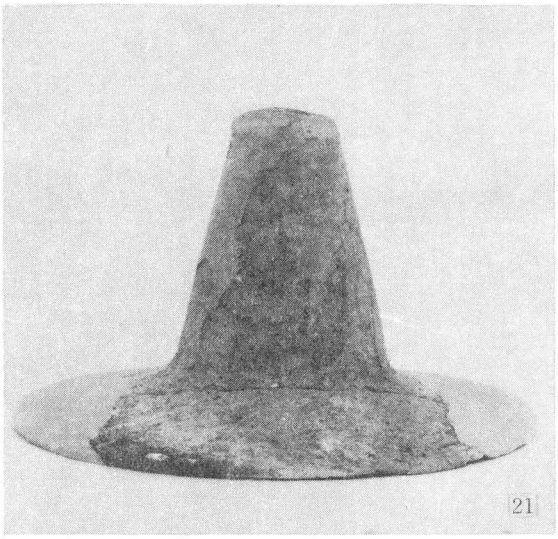


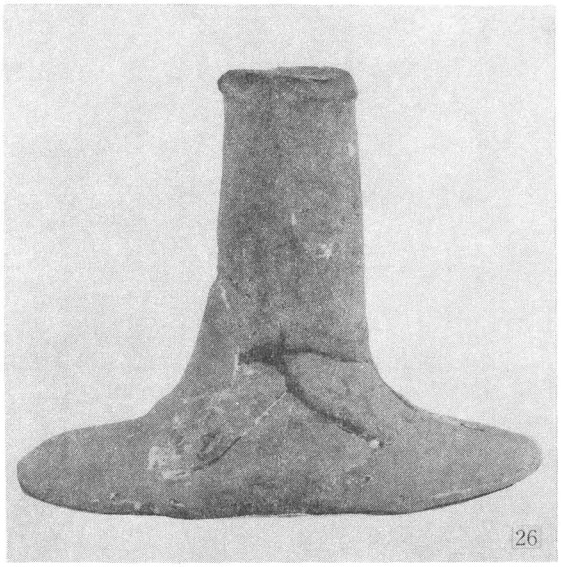


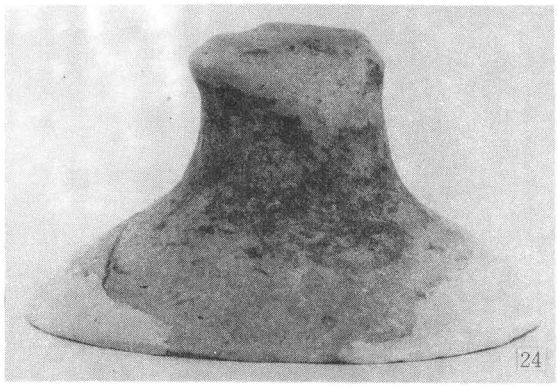


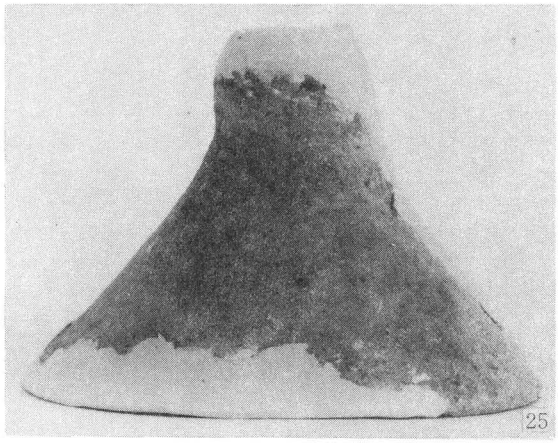
豊中 477－1　　出土遺物

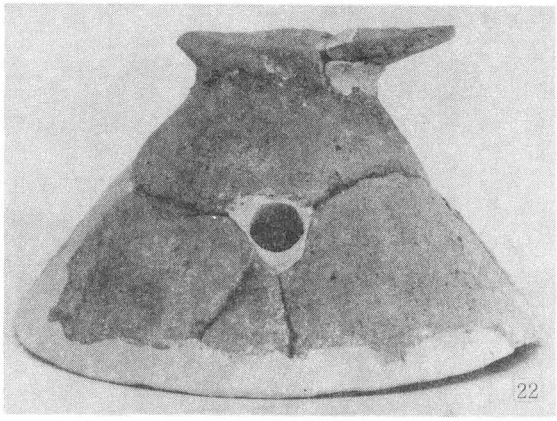


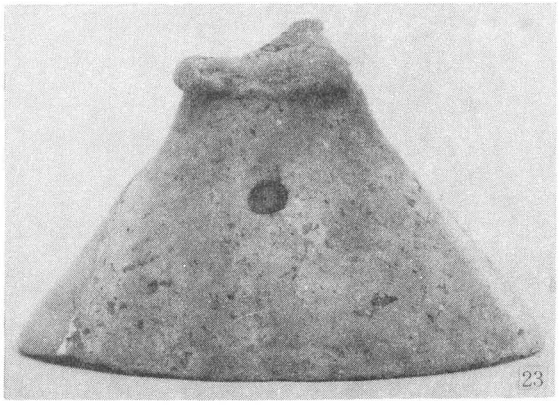




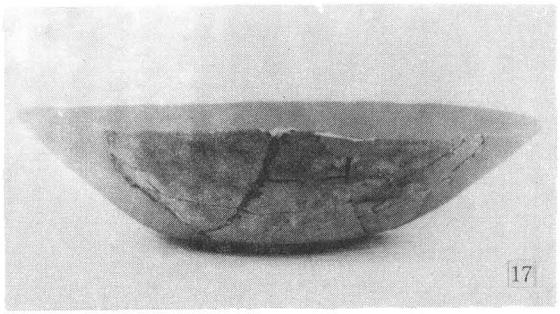


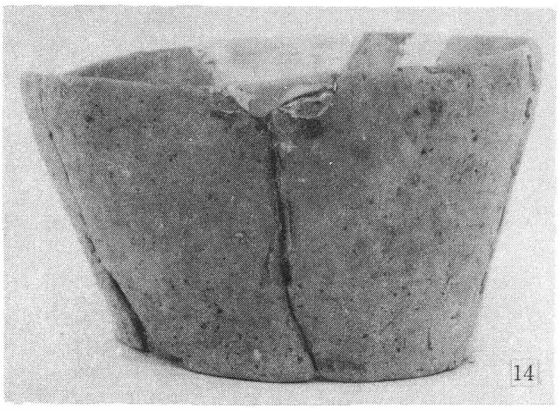


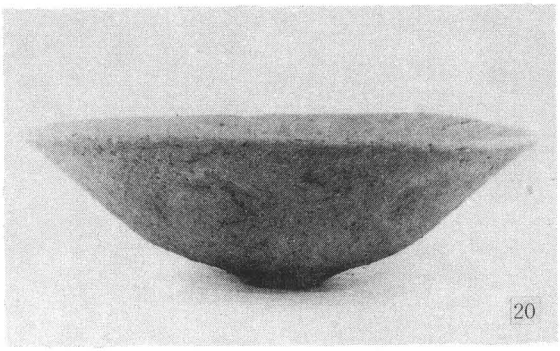


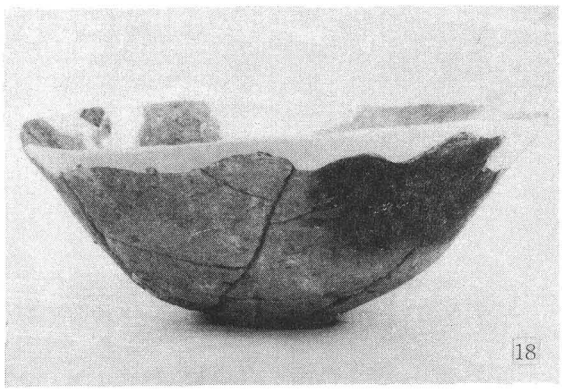


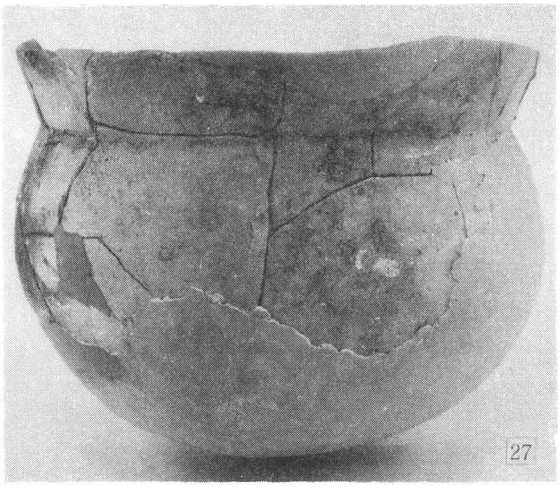
豊中 477－1　　出土遺物











豊中 477－1　　出土遺物